校長室だより～燦燦～ №８９１

国語科の先生

2023.11.5

本当は社会科の先生になりたかった。社会科が好きである。地理も歴史も公民もである。一番と言われれば歴史だろうか。中学時代の恩師の影響もある。

ところが、国語科の教員になってしまった。今でも社会好きは変わらない。いろいろな教科の授業を見る機会がある。社会科の授業のときは、自分でもちょっと違うことを自覚している。ついつい発言したくなる。つまらない授業であった場合は、他教科以上に厳しい目になってしまう。

しかし、自分ではわかっている。今、急に社会科の授業をやってくださいと言われても、とてもとても思うようにはできない。それほど甘いものではない。教材研究がなければ、できるものではない。でも、やってみたい。

国語科の先生なのに、社会科好きが発揮されるときがある。古典の時間である。それも「平家物語」の学習である。源平の合戦、源義経の活躍などについて、資料を使いながら語る。それも生き生きと解説する。生徒はどう思っているかわからない。ほとんど自己満足の世界である。

今になって思うと、国語の先生でよかったと思う。他の人生を経験したことがないのでわからないが、一番やりたかったことができるのはもちろんいいことである。だが、一番やりたかったことはできずに、第２希望で生きていくのもわるくはないのではなかろうか。一番やりたかったことへの思いを抱きながら生きていく。２番目だからこそ努力をする。さほど好きでもないし、第２希望で申し訳ないのでがんばる。それが、かえっていい。少なくとも、私の場合はそうである。

社会科に比べると、国語科は教えるべきことがわかりにくい。資質・能力ベースの話になると、余計にむずかしくなる。国語科の授業は、その授業者によってだいぶ変わってくる。それだけにこわい。やり方次第では、授業をやってもやらなくてもさほど変わらないケースも出てくる。

日本人であれば、国語科の授業を受けなくても、日本語を読み、聞き、話している。学校で国語科の授業を受けた場合と、受けない場合とでは、何が違うのか。そう考えると、音読や作文、漢字などがいかに重要なのかがわかる。問題は、文章の読解、すなわち読み取りである。文章の意味がわかり、そこからどんなことを考えることができるか。その技能や能力を身につけさせたい。

ところが、この読解の授業がむずかしい。読解こそが、国語科の先生の腕の見せ所である。ここでは、教材研究の深さがものを言う。文章を読み解くことはできても、それを教えるとなると、話は別である。これは、他教科にも言えることであろう。

社会科の先生になりたかったと今でも思っているわけではない。かといって、国語科の先生でよかったと心底思っているわけでもない。きっと、教科に対する強いこだわりや思いはないのだろう。漠然と学校の先生になりたかったのかもしれない。教員免許を取得する関係で国語科を選んだというだけである。それが、自分の人生にここまで大きな影響を及ぼすとは想像できなかった。人生とはわからないものである。その一方で、おもしろいものでもある。